旧大國家住宅（国重文 和気）

大規模改修へ

所有財団

江戸時代の大地主の邸宅で国重要文化財の「旧大國家住宅」（和気町尺所）が、初めて大規模改修される見通しとなった。着工は数年先となりそうだが、建物見学は昨年末で休止し、準備が本格化している。所有する一般財団法人は町と連携し、老朽化した箇所を修繕するとともに、教育・文化施設として活用したい考えだ。

同住宅は江戸時代に酒造業や舟運業で栄えた豪商の住まい。1760（宝暦10）年建造の主屋（おもや）、身分の高い客を迎える部屋を備えた「蔵座敷」などがある。中でも入り母屋造りの二つのかやぶき屋根を瓦屋根でつないだ「比翼入り母屋造り」の主屋は、民家では全国で唯一の現存という。

町と連携 教育・文化施設に活用

2002年に住人が町に寄贈。町内では唯一の国重文の建物で、年1、2回の一般公開に加え、イベントで活用したり、申し込みに応じて随時見学を受け入れたりしてきた。

半面、築250年を超え、老朽化も目立ってきた。建物は傾き、雨漏りもするという。瓦が落ちた箇所もあり、屋根の複数の場所をトタンで覆うなど応急処置でしのいできた。そうした中、住人の親族らで立ち上げた一般財団法人大國家（岡山市北区大和町）から「改修して活用したい」との申し出があり、昨年2月に所有権を同法人に移転。改修に向けて動きだした。

町は昨夏、建物の状態について詳細調査を開始した。本年度内に結果をまとめ、同法人と共同で具体的な改修計画を策定する予定。改修費の大半を国や県、町の補助で賄えるが、費用は数億円に上るとみられ、着工は数年先と見込んでいる。

国際医療ボランティアAMDAグループ代表でもある同法人の菅波茂代表理事（70）は「歴史ある建物だから残すというのではなく、次世代の教育・文化施設として活用し、地域振興に役立てたい」と話す。（平松隆）

初の大規模改修に向け、準備が進む旧大國家住宅。見学の受け入れは昨年末で休止された